

2024年8月18日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教6 「何を求めているのか」

出エジプト20：18～21、ヨハネ1：35～42

洗礼者ヨハネは、イエスさまが歩いておられるのを見て「見よ、神の小羊だ」と言いました。この言葉を聞いたヨハネの二人の弟子は、何のためらいもなくイエスさまに従います。彼らはそれまでヨハネの弟子でした。でもヨハネを捨ててイエスさまに従います。これは、これまで従ってきた師から、新しい師に変わることです。でもこれは単にAからBに主人が変わった、こっちよりもこっちがいいからと乗り換えたという話ではなく、本当に従うべき方、本当の主に出会ったということでしょう。そこに彼らが求めていたものがあったのです。いみじくもイエスさまはそのことを彼らに尋ねています。「何を求めているのか」(38節)これがヨハネ福音書では、イエスさまの第一声となります。弟子たちは何を求めてイエスさまに従ったのでしょうか。わたしたちは何を求めて教会に来ているのでしょうか。「何を求めているのか」これは信仰者の存在そのものを問う非常に意味深い問いかけです。

この問いかけに対して、二人の弟子はいささか見当違いな答えをします。「彼らが『ラビ(先生という意味)どこに泊まっておられるのですか』と言うと、イエスは、『来なさい。そうすれば分かる』と言われた。そこで彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるのかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである」(38b～39節)彼らも自分たちが何を求めているのか分かっていないと言えます。しかしこの見当違いな答えが、彼らが求めるべき救いの本質を引き出すことになりました。イエスさまは「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃって、親切に自分の泊まっているところに彼らを招き入れました。「何を求めているのか」という問いかけは、むしろ「来なさい。そうすれば分かる」ということなのでしょう。イエスさまのところに行く。そうすれば何を求めているのかが分かるのです。

ここで注目したいのが、「泊まる」と訳されている言葉メノーです。これはヨハネ福音書に特徴的な言葉で、新約聖書には全部で118回この言葉が出て来ますが、そのうちの40回がヨハネ福音書、またヨハネの手紙Iに24回、つまりヨハネ文書と呼ばれるものに圧倒的に多いのです。例えば、ぶどうの木の譬えがあります。イエスさまが「わたしにつながっていなさい」(15：4)とおっしゃった。この「つながる」と訳されている言葉はメノーです。ですからこれは単に「泊まる」だけではなく、何かにとどまる、つながり続けるということです。彼らはイエスさまのところに行って、そして泊まった。それは表面的には一晩一緒に泊まったということでしょうけれども、もっと深い意味としては、イエスさまのところに入り、イエスさまとつながった。そういう深い人格的な出会いが示されているのです。

イエスさまは「何を求めているのか」「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃった。それは教会に行って、洗礼を受けること、そのようにしてイエスさまの体につながることで、そのことによって自分が何を求めているのかが分かるということではないでしょうか。ちなみに「分かる」と訳された言葉は「見る」という意味もあります。洗礼を受ければ見える。イエスさまが見えてくる。前のところに「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」(1：26)とありました。それまでは見えなかった。知らなかった。でもイエスさまのところに来て、人格的に深く出会うことを通して、イエスさまが見えてくる。このお方こそ、わたしたちが本当に求めているお方だと。

さて、ヨハネの弟子だった二人のうちの一はアンデレでした。後の十二弟子の一人です。彼は兄弟のシモンのところに行って、この出来事を伝えました。そして言いました。「わたしたちはメシア（油を注がれた者という意味）に出会った」（41節）この「出会った」と訳されている言葉も「見る」「見出す」「発見する」という意味があります。この言葉は原文ではエウレーカメンという言葉ですが、皆さんも聞き覚えがあるかもしれません。アルキメデスがお風呂に入っている時に、アルキメデスの法則を思いつき、思わず「エウレーカ！」と叫んだ話です。これは「見つけた！」「発見した！」という意味です。イエスさまに出会い、アンデレは「わたしたちはメシアに出会った！」と言った。それはとうとうメシアを見つけたということでしょう。今やっと何を求めているのかが分かった。イエスさまだ。この方こそメシア、キリストだ。

そしてこの後、アンデレの兄弟のシモンもまたイエスさまに出会うことになりました。「そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、『あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ（岩という意味）と呼ぶことにする』と言われた」（42節）イエスさまと出会った人は、この出会いの喜びを他の誰かに伝える者とされました。そのようにして弟子たちが生み出されていきました。わたしたちが伝道するというのも、そういうことなのではないでしょうか。求めるべきものを見失う。そこに神さまから離れ、迷い出た人間の罪の姿があります。でもイエスさまに出会った人は、その求めるべきものを見出し、そしてこれを伝えることができる。そしてこの出会いがまた新たなキリストの弟子を造るのです。大切なことは、わたしたちの方から行かなくても、イエスさまの方がわたしたちに出会ってくださるためにこの世に来てくださったということです。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」（1:14）「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃったお方は、自らわたしたちのところに来てくださり、わたしたちを見つけてくださった。わたしたちに出会ってくださいました。

以前、ご紹介したかもしれませんが、かつてこの教会に特伝で来られた永井修先生、そのお連れ合いさんが、カールバルトのもとで神学を学んだ永井春子先生です。永井春子先生の『青少年のためのキリスト教教理』という本があります。これはカテキズムの形式になっていますが、その第一問が「キリスト教とは何ですか」と問うて、「キリスト教とはキリストです」と答える。キリスト教とは、あれこれ口で説明して分かるものではない。何よりもキリストに出会うこと。ここに神学を深く学んだ一人の行き着いた結論があります。だからわたくしも声を大にして言いたい。とにかく教会に来てください。そうすれば分かる。そうすればあなたが求めるべきものが何であるか分かります。

天の父よ。本当に求めるべきものを知らずに彷徨うわたしたちですが、そのわたしたちのところにイエスさまは来てくださりわたしたちと出会ってくださいます。どうぞその恵みに応えて、わたしたちも教会に来て、礼拝において現臨されるイエスさまと出会うことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。